

止まり木合同本

vol.8



目次

(著者名は敬称略)

表紙イラスト、本文挿絵…ピーすけ

少し先のナイトメア

著者…ネームレス 4

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における第8回クイズ大会(2015年11月7日)にて

西沢歩の普通じゃない世界

著者…充電池 14

上位を取った方々による、合同小説本です。

泉「兎に角？」

著者…明日の明後日 30

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

修学旅行レベル4

著者…RIDE 36

<http://soukensi.net/perch/>

時計塔の誓い

著者…瑞穂 42

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

<http://soukensi.net/perch/sp/quiz08/>

アリスの部屋38 (サンバ)

著者…ロッキー・ラックーン 52

Tomorrow

著者…雪月 60

著者あとがき & メッセージ

64

編集後記
奥付

70

少し先のナイトメア

著者…ネームレス

「了解いたしました」

そう言って未だ眠気からは完全に冷めない重い体を起こし、ベッドの横に用意された服に着替えようとしー

日が昇る。

窓から差し込んだ光が顔を照らし、瞼を閉じながらでも「朝が来た」と感じさせた。

「クラウス」

「はい。なんでもございましょう」

「ハヤテとマリアはどうした？」

「ハヤテとマリア……？」

「お嬢様」

彼の声が聞こえた。聞き慣れた声だ。

毎朝のように私を起こし、世話をしてくれる、信頼でききる存在。

誰でございましょうか？」

「……クラウスか」

「ナギお嬢様。大学に行く時間でございます。朝食の用意は済んでおりますので、お急ぎでお願いします」

「相変わらず、ギリギリだな。もう少し早く起こせんのか」

「再三起こしましたが、「あと五分」と言って聞かず、終いには寝言でタマに私を襲わせる始末に……」

「ああもうわかったわかった。愚痴なんぞ聞きたくない。着替えるから外に行け」

日が昇る。

窓から差し込んだ光が顔を照らし、瞼を閉じながらでも「朝が来た」と感じさせた。

「ほーらナギ。朝よ。大学、遅れるわよ」

聞こえてくるのは同じアパートの住人。大家であるはずの私にこの口の聞き方はなんだ、とも思いながらも一人で起きるのが苦手な私をこうやって毎日起こしてくれるのには感謝だ。贅沢を言うならあと五分、いやいっそ今日一日中寝かせてもらっても問題はないのだが。

「ヒナギク……人間の三大欲求は食欲性欲睡眠欲だ。今の私はとても眠いすごく眠い。この誘惑を断ち切るには私は自身の精神に過度な負荷、つまりは多大なストレスをかけることになる。ストレスは体に毒だ。故に私は寝る。体を労わることも大切だ」

そういつて私は布団の中に入り再び寝ようと

「毎朝毎朝こんなことに時間かけさせないで！ほら起きなさい！」

「むう……」

どうも私はヒナギクという人間が苦手だ。渋谷から今日着る服を適当にチョイスしてー

「そういえばヒナギク」

「なに？」

「ハヤテとマリアはどうしたのだ」

「ハヤテとマリア……？」

誰？ 友達？



日が昇る。

窓から差し込んだ光が顔を照らし、瞼を閉じながらも「朝が来た」と感じさせた。

「ナギ。今日はまだコミケ二日目だぞ。起きろ」

聞こえてくるのは共通の趣味を持つ友人の声。ホテルで2人部屋を借り、一緒の部屋に寝泊まりしてコミケを

心の底から満喫していた。私は体力がないから途中でばてて倒れる前に避難したのだが。

全く、幾ら楽しみだとはいえ、その細い体のどこにそんな体力がと思いながら私は答える。

「千桜……私はもうダメだ。リストを渡すから一緒に買ってきてくれ」

「自分で買うから楽しいんだろこういうのは！カユラも待たせてんだから行くぞ！」

カユラ。

私の漫画家としての片鱗を見て高校卒業とともにムラサキノヤカタから出て行くも、それ以降もことあるごとに遊ぶ友達。

実は私は現在、少年サ○デーにて漫画を連載し、一端の漫画家として活動している。ルカもアイドル業が落ち着き、漫画も描いて同じサ○デーにて連載中。時々コラボしたりして切磋琢磨していくライバルだ。

唯一引つかかるものがあるとすれば、一般向けするように描いてるためどこか私らしさを感じられずにいることだ。現状に満足せずいつか本当に一兆部売れる漫画を描くことに今なお飽くなき情熱を燃やしていた。

「ついでに今連載してるのは貧乏執事とお金持ちのお嬢様のラブコメを描いていてそこそこの人気でアニメ化も決定」

「誰にないを説明してるんだよ。早く行くぞナギ」先生

「むっ。からかうな千桜」

「はっはっは。友達特権だ。このぐらい許してくれ。下で待ってるぞ」

「ああ」

そう言つて今日の準備を手短に――

「なあ千桜」

「なんだ？」

「ハヤテとマリアはどうしてる？」

「ハヤテとマリア……？」

「なにかのキャラか？」



何度朝を繰り返して、何度あの二人のことを問いかけても、帰ってくる答えはいつも同じ。

ハムスターの家に泊めてもらいハムスターに聞いても知らなかった。

ジジイのところに泊まり一緒についてきたアリスに聞いても知らなかった。

ワタルのところで寝泊まりさせてもらいワタルに聞いても知らなかった。

伊澄と旅行に行つて旅行先で伊澄に聞いても知らなかった。

咲夜も泉も美希も理沙も愛歌もサキさんも文もシャルナも雪路も薫先生も東宮もシスターもルリもギルバートも一樹も変態も恋葉もー

誰もあの二人を知らない。

時折、私がおかしいのではないかと思う。

あの二人がいない少し先の未来、あの二人がなくて

も私は生きていた。それは、あの二人なんていなくて、あの二人が私の妄想なのではないかと、そういう事なんだと感じた。

あの広い屋敷を支えてくれたのはクラウド。

ムラサキノヤカタを支えてくれたのはヒナギクを中心にした住人たち。

私の漫画を支えてくれたのは千桜、カユラ、ルカの友人とライバル。

あの二人が入り込む余地は無かった。

幾千と迎えた朝の中に二人の影が入り込む余地など無かった。

なら、あの二人は私の妄想だったのだろうか？

ー違ふ。

「っ！」

「どうしましたナギお嬢様」

クラウドが突然立ち上がる私に驚いたように問う。

「ハヤテとマリアはどこだ！」

「だから誰なのよそれ。漫画の読みすぎじゃない？」

「ナギ！ 時間が無いんですから急いでください！」

「マリアああああああああああああああああああ!!!」

「ちよっ、なんなんですか!？」

「さあ。僕にはさっぱり」

マリアだ。マリアの匂いだ。マリアの柔らかさだ。マ

リアの暖かさだ。

今はただ、その本物に会えた喜びに身をゆだねたかった。

「ああもう！ さっさと食事に済ませて学校に行きなさい

—————い!!!」

いつものようにハヤテに連れられ白皇学院へと向かう

道中。いつもの制服に着替え、いつものように登校していた。今はそれが無性に嬉しかった。

「ハヤテ」

「はい」

「私たちはこれからもずっと一緒だ。大学に行っても社会人になっても、ずっとずっと一緒だ。わかったな！」

私がそう言うと、ハヤテは驚いたように目を見開き、

そして穏やかな笑みを浮かべこう言った。

「はい。お嬢様」

♪♪♪

「ご機嫌ですね。お嬢様」

「ああ。ハヤテとマリアに会えたからな」

「昨日もいましたけど」

「そうなんだが……まあいいではないか」

裏話

「いやー。危なかったなー。もうちよいでナギの魂が食われてたんやる？ 伊澄さんも何時になくマジやったからホンマ焦ったわ〜」

「ええ」

とある場所、二人の少女が疲れ切ったように話していた。

「結局あれってどういう妖怪だったん？」

「妖魔の一種よ。魂喰らい。悪夢を見せ、弱った魂を食い散らかし人を殺す妖怪」

「怖っ。じゃあ今回もやばかったんか？」

「……それでも無かったわ」

「ん？ じゃあなんで焦ってたん。まあ親友が食い物にされそうになったら焦るやろうけど」

「……」

黒く長い髪の少女は少しだけ口元を緩めながらこう答える。

「途中まではナギの魂はとても弱っていたわ。あと一歩で食べられていたかもしれない」

「ん？ じゃあどうしてやばくなかったんや？」

「だってナギは、ワガママだから」

活発そうな少女は頭に疑問符を浮かべ、続きを促す。

「嫌な夢を見せられて、認めたくない現実を突きつけられて、なにかもをどうでもよくなって。上手くいったから魂喰らいも欲張ったのね。でもナギは、自分の思い通りにならない現実を受け入れるはずがないもの。自分が信じるものこそが真であると貫いて、結局魂喰らいの方がナギの強い意志に当てられ存在を保てなくなってしまうたの。私たちがやったのはまあ後処理ね」

「はぁーん。ま、負けん気は人一倍強い奴やからなー。追い詰められて逆に強気なっただってことか」

「そういうこと。精神勝負ではどちらがより自身を肯定できるかの勝負だから」

二人は親友が何時ものように浮かべるムスツとした表情を思い浮かべ、笑った。

「さ、私たちも帰りましょうか」

「息を吸うように道を間違えるな。こっちや」

「……」

「ほらムスツとしてないで帰るで。ナギにも会いたいやろ？」

「……そうね。行きましょうか」

西沢歩の普通じゃない世界

著者…充電池

この話のオチは夢オチです。

なーんてセリフから入れば、ある意味、夢オチも斬新なんじゃないかな？

とか思う今日この頃、皆さんいかがお過ごし——

「……って！いきなり浮いてるうーうー!!」

嗚呼……どうやらここは、本当に夢の世界のようです。ていうか私、一体誰に語りかけているんだろう。あ、でも待つて？今この瞬間が夢であることを認識できているということは、かなりラッキーなことなんじゃないかな？現に私は今、空を飛んでいる！ここが本当に夢の世界だということは、つまりそれは私の世界！すべが思い通り！なんでもできる！夢だと分かっているのなら、この状況を楽しまない手はないよ！

「あ、ヒナさん発見！おーい、ヒナさーん！」

「あら歩じゃない。珍しいわね、こんな富士山の頂上で会うなんて」

「うわっ！学校帰りかと思っいたらいきなり富士山の頂上!! さすが夢の世界……」

「どうかした？」

「う、ううん！それよりヒナさんはここで何を？」

「私？私はこれよ」

「ああ、魚釣りですかー。って魚!! 富士山って池とかあるのかな……？何が釣れるんです？」

「じゃーん！見て、秋刀魚よ秋刀魚」

「さ、秋刀魚!! 秋刀魚って普通、海で獲れる魚ですよね!! 大丈夫なんですかそれ!!」

「ふふっ、平気よ。その池で獲れる秋刀魚は、みんな新鮮で焼きたてだから」

「焼きたて!! 焼きたての秋刀魚が獲れるんですね! スゴイですねヒナさん！」

「あ、もうこんな時間。私、帰って夕飯の支度しないと」

「秋ですもんねー。きつと美味しいんだらうなあ」

「良かったら歩も、今晚一緒にどう？」

「いいんですか！」

「もちろん。今夜は牛丼よ」

「秋刀魚じゃないんですか!! せっかくの新鮮な焼きたて秋刀魚なのに！」

「平気よ。一度水槽に戻しておくから」

「それ平気じゃなさそうなんですけど!？」

「じゃあ歩、私は先に下山してるから。七時頃に駅前の吉〇家で会いましょう」

「しかも外食なんですか……」

恐るべし夢の世界……。まあでも、夢って大体こういうものな気がするし、いちいち驚いていたらキリがないよね。異世界に飛ばされたライトノベルの主人公のごとく、私も柔軟にならなきゃ。そう……。たとえどれだけ変な人が現れたって柔軟に。鬼や悪魔、はたまた妖怪や妖精が出たっておかしくないんだ。神羅万象を受け入れ、私は一秒でも長くこの夢の世界を満喫するんだ!

「もしもし、そこのお方」

「はい？」

さっそく誰か来た。……ってあれ、振り返っても誰もいない。たしかに声は聞こえるのに。

「さぞ名のあるお方とお見受けします」

「だ、誰! どこにいるの?」

「申し訳ございません。姿が小さい故、見つけにくいか

もしれません。少し、あなたの肩に止まらせていただきますよ」

耳元で一瞬だけ聞こえたのは、羽がはためく音。鳥や昆虫の音とは少し違う。サラサラと、上品に舞うような聴き心地。もしかして本当に妖精なのかな? しばらくすると音は止んで、私の肩に何かが乗るような感触が伝わった。そこにいたのは――

「もしかしてあなた、妖精さ……。ぎゃああああああああああああつ!」

「いかにも。私は風の妖精、クラウスと申します。以後お見知りおきを」

「あ、はい……」

無理無理無理無理! 夢だから驚かないなんて決意した後だけど、こんなの絶対無理だよ! あんなに小さくて、まるでピーターパンに登場するティンカーベルみたいな姿なのに! なんて顔だけ白髪のオジサンなのかな!? 私の夢は頭おかしんじゃないかな!?

「あの、それで私に何か御用ですか……」

「はい。実はあなた様にお問い合わせがあって参りました」

「お願い？」

「あなたもご存じ、大魔王マリアについてでございます」

「大魔王マリア……もしかしてこの展開は……」

「我々人類に仇なす大魔王マリア年齢不詳。その傍若無人で残虐非道なまでの振る舞いを、もう見過ごすことはできません」

「う、嘘だ……私はマリアさんをそんな風には思っていないよ……」

「そこであなた様に、大魔王マリアの退治をお願いしたいのです」

「ど、どうして私なの？ 私じゃどう考えても敵いっこなさそうなんです……」

「予言でございます」

「予言？」

「富士の頂上で焼きたての秋刀魚を乱獲せし者、勇者となりて、必ずや悪を滅ぼさん……と」

「なにそのバカみたいな予言……。っっていうか私、秋刀魚なんて別に獲ってないですし」

「ははは、ご謙遜を。こんなにも獲っているじゃないですか」

「えっ……ああああ！ ヒナさん忘れ物おおおお

おっ！」

カゴいっぱい詰まった秋刀魚たち（焼きたて）。間違はなくヒナさんが釣ったものなのに、これを忘れて帰ったら、ヒナさんは一体何しにここへ来たのやら……。いや、まあ夕飯は牛丼みたいだから大丈夫なんだろうけど。

「ご理解頂けましたかな？」

「いや、正直、全然意味が分かりません」

「なぜです？ こんなにも大量に焼きたて秋刀魚を釣っておきながら」

「そもそも焼きたて秋刀魚を釣ること自体、要領さえ知っていれば誰にでもできるじゃないですか！」

「ははは、ご冗談を。生魚ならともかく。焼きたての魚を釣るなど、普通の人にはできませんぞ」

「今さら正論を言われても困るんですけど……」

こうして私は、半ば強制的に大魔王の討伐を任された。こういうのってテレビゲームや漫画の中でしかありえないことだから、貴重な経験といえましょう。秋刀魚がどうのこうのとか、妖精オジサンとか、その辺りの設定はもう少しどうにかならなかったのかなあ。そんなこんなで私は、いよいよ最終決戦の地、マリア城へとやって来た！

「おーっほっほ！ ほらタマあ？ ネコはネコらしく、良い声でワンと鳴きなさい！」

「わ、わうーんっ！」

うわあ……帰りたい。

「やい、性悪メイド！ そこまでだ！」（裏声）

「性悪メイド、ですって？」

マリアさんに向かってそんな暴言を吐くなんて、すごい妖精さんだなあ。私、知らないって。

「鬼ヶ島へ帰れ、この鬼！ 悪魔！ 三十七歳！」（裏声）
「あらあら、威勢がいいわね。あなたを八つ裂きにする

前に、名前くらい聞いておこうかしら？」

「アタシの名前は西沢歩。アンタよりも一世代下の、現役女子高生よ！」（裏声）

あっはっは、すごい挑発的だなあ。さすがにそこまで言ったらダメだよ。まったく妖精さんったら、流れでここまで来ちゃったけど、ここまできたら私、もう手に負えない——

「……って、ええええええええっ!? 違う違う！ 私、何も言っていないよオ！」

「ふふふ……小娘の分際で、良い度胸ね」

「いやだから違うってば！ ね、聞いてマリアさん！ 今言ったのは私じゃないよ！ この妖精さんが言ったんだよ！ 妖精さんもほら、早く冗談だって言って……って、逃げたああああ!!」

言うだけ言って逃げるなんて、酷いクズ妖精さんだよ……。

「冥土の土産に教えといてあげましょう。……私は、十七歳です！」

「知ってます！」

「本心ではそう思っていないくせに！ 知っているんですよ！ 私が十七歳だと言った際に『マリアさんじゅうななさい』と表記して、三十七歳だとネタにしているあなた達の実態を！」

「いやだからしてませんって！」

ダメだ……夢の中のマリアさん、もうこれ以上はブレーキが効かないよ。こうなったら本当に、戦って勝つしかない。大丈夫だよ、現実世界ならまだしも、これは私の夢。私が望めば何だって出来ちゃう世界なんだから。

「覚悟なさい小娘……」

「うっ……何か武器は………あっ」

その瞬間、何かが手に触れた。細長くてパリッと固いの、簡単に崩れてしまいそうな脆さもある、それは……

……秋刀魚ッ！

いやいやいや、マリアさんに対して、秋刀魚でどう対抗しろと？ いくら富士山の頂上で獲れた焼きたての秋刀魚でも、武器としては何の役にも立たないんじゃないかな？

いや待てよ？

これは夢なんだから、常識にとらわれるのはナンセンス！ ただの秋刀魚が序盤から散々出張ってきたのにはきつと意味があるんだ。あのクズ妖精さんも、秋刀魚を獲った者こそが選ばれし勇者だのことを言っていた。……獲ったのはヒナさんだけだ。

「ええいままよ！ 行きますよマリアさん！ くらえ、秋刀魚シュート！」

西沢選手、豪快に振りかぶる。秋刀魚をマリアさん目にかけてシューッ！ 秋刀魚はその形状を維持したまま一直線にマリアさんへ向かう！ そしてマリアさん、秋刀魚を無事キャッチャーミットへおさめてストライク！ ……ってダメだこれ！

「あなた、ふざけているのですか？」

「あ、いえ……」

「食べ物で粗末にしてはいけません」

「はい、すみませんでした」

なぜ私は、秋刀魚こそがマリアさんに対抗し得る手段なのだと考えてしまったのだろうか。急に冷静になって虚しくなる。

「では次は、私の番ですね……」

「うっ、どうしよう……誰か……誰か助けて……」

神様仏様、どうかわたしを助けてください。何でもしますから。

夢の中だからだろうか……私の薄っぺらな願いは、次の瞬間、声となって響いた。

「そこまでマリア！」

「誰!? いいえ、分かりません……休日は無駄に張り切つて、平日は気だるそうに学校へ行きたくない駄々をこねていそうなその声は……ナギ！」

ひどい解説だ！

「ありがとうナギちゃん！ 助けに来てくれたんだね！」
「ふむ、ハムスターよ。私が来たからにはもう安心だ。」

私の持つ筋力、頭脳、体力、俊敏さ、生活力、人徳……以外に関してはマリアに勝る自信がある！」

「全然勝てる要素なさそうなのに、すごい自信！」

でも、私ひとりよりは断然心強い。

それに、夢の世界で設定があべこべとはいえ、仮にもマリアさんはナギちゃんのメイドさん……簡単には手出しできないはず！

「そんなことよりナギ？ 散らかした部屋はきちんと片付けたの？」

「そ、それは……」

「漫画のメ切が過ぎたら片付けると言っていたじゃないですか」

「グサツ」

「結局、中途半端な所まで描いて諦めて、おまけに『今はまだその時ではない』だなんてそれっぽい言い訳をして……他人の漫画に対しては、あれがダメこれがダメと専門家気取りで評価する始末」

「グサツ グサツ グサツ」

ダメだ……容赦なさすぎるよマリアさん……。

「ええい、うるさいうるさい！ 何と言われようと、勝てば良かるうなのだッ！」

「す、すごいよナギちゃん……もうどっちが悪なのか分からないよ……ッ！」

相手がナギちゃんです油断しているのか、マリアさんは棒立ちの状態。ナギちゃんというのと、戦意むき出しでいつでも飛びかかっているような体勢にある。普通なら勝ち目は無いけれど、この状況ならもしかして、もしかするかも！

「よし……ナギちゃん、行こう！」

「うむ！ ……あつ、ちよつとタンマ」

「え？」

「その前に少し、ゲームの続きをさせてくれ」

「へ……？」

「発売されたばかりのモンスターハンターポケットだ。中断させたままだったのを、今思い出して」

「え……なにそれ」

「妖怪を集めてポケットのモンスターをハンティングする有名なゲームだぞ。知らんのか？」

「いやいやいや、そうじゃなくて！ 今は戦いの真っ最中なんだけど!!」

「そう慌てるな。それはとりあえず、このダンジョンを攻略してからな」

そう言ってポチポチと携帯ゲーム機を操作し始めるナギちゃん。ダメだ……妖精さんと同じく、私の周りのサポートキャラはまるで役に立たない……。敵は目の前にいると言うのに……。

「もう、ナギったら、また新しいゲームを買ったんですか？」

「うむ、今回はなかなか味わい深いテイストだ」

「あ、黄色いネズミが出てきましたね」

「そのネズミには、この赤いネコが効果的なのだ」

「流行の縮図みたいなゲームですねえ」

なぜかマリアさんが普通に会話に混ぜてくるッ！

もう訳が分からないよ、夢なんだから当然なんだけど。

これってつまり、マリアさんの大魔王設定がどこかへ消えちゃったのかな？ だとしたら私、もうここにいる意味ってない？ そっか……それならもう、そろそろ夢か

ら覚めても――

「うーむ、ここでいつも負けてしまう」

「バトルではなく、大量の水が流れ込んで溺死してしまうところが、なんともアレですね」

「こういうのはビキナーズラックというものが大切だ。ほらハムスター、少しやってみてくれ」

「ええ!? 私? あんまりゲームはやらないんだけど……」

「だからこそだ」

さつきまでのピリピリしたムードはどこに行ったのやら、とにかくゲームをやってほしいと、ナギちゃんは私にゲーム機を差し出す。

ゲーム機を受け取って、ボタンに手を添えたその瞬間、目の前が一瞬ゆがむ。私は大魔王マリアさんの城にいて、それがいつの間にかナギちゃんのゲーム部屋に切り替わっていて、今度は薄暗い洞窟の中に迷い込んだみたい。なんとなく察しがつくけれど、これってゲームの中?

「左様でございます」

「あーっ! 妖精さん! さつきはよくも!」

その場にナギちゃんとマリアさんの姿はなく、いるのは逃げ出したはずのクズ妖精さん。

「お察しのとおり、これはあなたの夢の世界」

「もう夢の世界は懲り懲りだよ……」

「では先へ進むといいでしょう。この洞窟はかなり複雑ですが、必ず外へ出る道があります」

「外へ出ると……どうなるの?」

「夢から、覚めるでしょう」

このあべこべな夢の世界から抜け出したいだけなのに、どうやら私はこのダンジョンをクリアしなければならぬみたい。普通夢なんて、覚めろ! って念じたら覚めるものなんじゃないのかな?

「はあ……まあいっか、ここにも仕方がないし、前へ進もう」

「用心してください、この洞窟は危険がいっぱいでございます」

「そんなの平気平気。マリアさんの時だって色々危険な

雰囲気だったけど、結局何もなかったし。うん、だってこれは夢なんだから。どんな危険が降りかかろうと、所詮は夢。現実には何の影響もないよ」

「……果たして、そうでしょうか」

「まったくもう、あなたが何を言ったって、私は信じない——ん？何か聞こえない？」

「我々の後方百メートルの位置まで、大量の水が流れ込んできている音でしょう」

「ああ、水の音ね。水が……え？」

な、なるほど……これはナギちゃんがさっきまでやってきたゲームの世界でもある。流れ込んだ水に溺れてゲームオーバーだと言っていた……。ゲームオーバーって、つまりはどうなるんだろう。セオリー通りだと、夢の中で死んでしまうと夢から覚めるはず……。だったら私、このまま水に飲まれてしまった方がいいんじゃないかな？

「このままでは水浸しですな」

「まあ、夢の中だし別に……あれ」

待って、夢の中で水浸しになるっていうのは……それこ

そセオリー通りだと、私は高校生にもなって大失禁……もとい、大失態をおかすことに……。これは、非常にマズイ。

「うわあああああああああつ！」

「もっと速く走らないと、数秒後には飲み込まれてしまいますぞ」

「妖精さん何とかしてよおおおつ！」

「妖精パワーで瞬間移動など心得ております」

「本当!? じゃあ……!」

「ただし、移動できるのは自分自身のみでございます。それでは」

また逃げたあああつ!

って言ってる場合じゃない。どうにかしないと、どうにかしないと、どうにかしないと!

そうだ、念じよう。これは私の夢なんだから、私の思い次第でどうにでもなるはずなんだ。さっきも結局マリアさんと戦闘にならなかつたのは、私が戦いたくないと心の中で想い続けていたからだ。

「お願い! 私をどこか、安全で幸せな場所へ連れて行

ってッ！」

目が覚めると、そこは白い空間だった。眩しいほどの純白。幸せを感じさせる温暖な空気。そうか……私は助かったんだ。もう何が何だか分からないけれど、とにかく助かったし、おまけに幸せな空間へ移動することができた。

「西沢さん」

聞き覚えのある、柔らかな声。振り返って声の主を確認すると、彼はそよ風に吹かれながら笑っていた。嗚呼、ようやく私は悪夢から解放された。目の前でほほ笑む彼の姿を見て、ほっと息が漏れた。

「ハヤテくん……」

目と目が合つて、それから数回まばたきをする。すると、真っ白だった背景に、急に色が現れる。ベージュの壁に、彩鮮やかなステンドグラス。無数のロウソクに灯る、優しい炎。私はそれだけで、ここが教会であることを悟る。そしてその瞬間に、私の着ている服がウエディングドレスであることに気が付いた。ハヤテくんはいつもの執事服とは違って、タキシード姿だ。

「やつとこの場所にたどり着きましたね、西沢さん」

「あの、えつとハヤテくん……」

「僕たちが結婚したら、もう西沢さんのことを名字では呼べなくなってしまうですね」

「結婚……私とハヤテくんが……結婚……っ！」

「ええ」

私はあの時からずっと、この人に恋をしている。恋をしているというのとは、つまり愛しているというので、愛されたいということだ。愛し愛され、そしてお付き合いの末、めでたく結婚したいということにも当然繋がる。そして今、私はハヤテくんと結婚できる場所にいる。

「私とハヤテくんが結婚だなんて……うそ……夢みたい！」

「はい。夢ですよ」

「え？」

「ですから、これは夢なんですよ、西沢さん」

そうだ……私はなんてバカなんだろう。あまりの幸せさに、これが夢であることを忘れていた。お付き合いもしていないのに、第一告白してフラれているし、それなのに結婚だなんて……都合よすぎるよね。でも、それが夢だというのなら、納得できる。

「そっか……あはは、そうだね。残念だなあー、ははははは」

「夢でも、いいじゃないですか」

「え？」

「西沢さんの夢の世界で生きる僕は、本気であなたを愛しています。西沢さんはどうですか？」

「わ、私は……」

本人を目の前にして、そう簡単には言えない。けれど夢だからなのか、自然と口が動く。

「……私も、ハヤテくんが好き。夢でも、現実でも」

「でしたら西沢さん、このまま夢の中にいきましょう」

「え？」

「夢から覚めたいだなんて、言わないでください」

「ハヤテ……くん？」

「僕と……この世界でずっと、一緒にいてください」

静かな教会の中、跪いて輝く何かを差し出すハヤテくん。それが何なのか、見る前に分かっていた。ここが教会で、私がウエディングドレスを着ていて、ハヤテくんがタキシードを着ているんだもの。

「指輪……」

「受け取ってください。西沢さん」

まさかこんなにも早く、男の人から結婚指輪をプレゼントされるなんて思ってもみなかった。しかもそれが、私の初恋の人から。

その代物は、喉から手が出るほど欲しいもの。それなのに、私は躊躇していた。

——私は本当に、この指輪を受け取ってしまったもいいのだろうか？

夢だから当然なんだけど、こんなの普通じゃない。何もかもが普通の私には、考えられない出来事だ。空を飛んで富士山の頂上まで行って、焼きたての秋刀魚を手に入れて、妖精さんに連れられて大魔王の城へ行って、ゲームみたいなダンジョンに迷い込んで……結婚の一步手前まできて……。普通の女子高生、西沢歩の普通じゃない世界だ。

「ハヤテくん……私……私……」
「……………」

今すぐにでもその指輪を受け取りたい。受け取って、たとえ夢でも、ハヤテちゃんと結婚したい。
——
だけど

「ごめんなさい。私、この指輪は受け取れないや」

「西沢さん……」

「現実の世界ではハヤテくんにフラれているから、これ

は願ってもない展開なんだけど……あはは、でも私……
……現実から目を、逸らしたくないんだ」

「……………」

「空を飛べなくなっちゃっていい。選ばれし勇者じゃなくなっちゃって、ゲームの主人公じゃなくなっちゃっていい。この世界が夢なら……大好きな人の、お嫁さんになれなくなっちゃっていいよ」

「現実には、とても厳しくて辛い世界です。それでも西沢さんは……夢ではなく、現実の世界を選ぶというのですね」

「うん。本当の私……現実の私はもっと普通だから、この世界には憧れるよ。でも、このままずっと夢の世界にいたら、今までの私の……雀の涙ほどの頑張りが、無くなっちゃう気がして」

「今までの……頑張り？」

「そうだよ。私は普通だけど、普通なりに努力したんだよ。ひとりの男性を好きになって、片想いを続けて、やがて告白して、フラれて、それでもまだ諦めきれなくて……普通なりの、最大限の頑張りでここまでやってきたんだよ。それなのにここで夢の世界に逃げたら、その頑張りも全て無意味になる。今まで大好きな人や友人と過ごしてきた思い出も……全部なくなっちゃう」

そう告げると、夢の中のハヤテくんは寂しそうな顔で笑っていた。

「意志は、固いようですね」

「うん。だから私……夢から覚めることにするよ」

「……分かりました。西沢さんが、そう仰るのであれば」

ハヤテくんは再び立ち上がり、手に持っていた指輪を箱ごと放り投げる。すると指輪は光を放ち、私の視界を一瞬だけ奪う。その一瞬のうちに教会の装飾が消え、服装も元に戻っていた。白く眩しいその空間には、赤い絨毯が敷かれていて、その先に扉が見える。

「あの扉の向こうが、現実の世界です」

「夢から……覚めるんだね」

「はい」

その一言を聞いて、私は歩を進めた。扉の目の前まで来てから立ち止まり、ハヤテくんに声をかける。振り返ろうか迷ったけれど、扉の方を向いたままでいた。

「ありがとう、ハヤテくん」

「いいえ、西沢さん。現実世界の僕を、どうかよろしく願います」

「えへへ、ハヤテくんは、夢の中でもカッコイイね」

「あなたが作った、僕ですから」

私が聞いたのは、その言葉が最後。

決意が揺るがないうちに扉を開ける。白い世界にさらに眩い光が差し込んで、思わず目を閉じた。

「歩？ ……良かった、目が覚めたのね」

見覚えのない天井を背景に、安心しきったヒナさんの姿が映った。なぜヒナさんが目の前にいるのかは分からなけれど、どうやら本当に夢の世界から戻って来られたみたい。

「ここは……どこ？」

「ウチだよ」

別の場所から聞こえたのは、ナギちゃんの声。つまりここは、三千院家のお屋敷ということになる。それは分かったけれど、ではどうして私はここで寝てしまっているのだろうか。それを尋ねる前に、ナギちゃんが答えを言う。

「道端で倒れているところをクラウドが偶然見つけてな、車でここまで運んだんだ」

「クラウドさん……？ ああ、あの妖精さんの」

「妖怪か幽霊の間違いじゃないか？」

「でも私、どうして倒れていたのかな……」

道端で倒れているなんて、おかしな話だ。助けてもらっ

たことは感謝してもきれないけれど、その状況に至るまでの経緯が分からない。その答えをくれたのはヒナさんだった。

「本当に覚えてないのね。歩、すごい高熱だったのよ」

「熱？ ……そういえば、朝出かけるとき、体調悪かったような……」

「まったく無茶するからよ。大人しく学校を休めば良かったのに」

「あはは……もうすぐテストだったから……」

ナギちゃんやヒナさんと違って平凡な学力の私は、風邪だろうと何だろうと、学校を休むわけにはいかなかった。とはいえ、普通なりの努力をしようとした結果がこれだから、目も当てられない。

「体調は大丈夫か？」

「うん、もう平気だよ。私、どれくらい寝てたの？」

「昨日の下校中に倒れたからな。ウチに一泊して、私たちも今、学校から帰って来たところだ」

「そ、それって、ほとんど丸一日寝たきりだったってこと!？」

「そうよ！ だから心配してるんじゃない！」

「ごめんなさいヒナさん……ナギちゃんも、心配かけちゃって……」

ガラガラと、扉の向こうで音が聞こえる。扉を開けてやってきたのは、台車にホカホカのご飯を載せてやって来たマリアさんだった。

「心配したのは二人だけではありませんよ。西沢さん、夜中も何だかうなされていましたから」

「マリアさん……」

まあ……その、あなたと戦闘になるところでしたから。

「それよりお腹、空いていませんか？ ヒナギクさんが秋刀魚の差し入れをして下さったので、よろしければどうぞ」

「秋刀魚!? もしかしてヒナさん、これ富士山で獲った焼きたての……!?!」

「いや、普通にスーパで安売りしてたヤツだけど……」
「ハムスター、まだ寝ぼけているのか？」

その事実を聞いて、これが現実であるという確信が持てた。

この世界では富士山で秋刀魚は獲れないし、オジサン妖精は存在しないし、マリアさんは大魔王なんかじゃない。ナギちゃんは相変わらずゲームやってそうだけど、ゲームの世界に入り込むことなんてないし――

「ハヤテくんは……」

「ハヤテならそこだよ。ほれ」

ナギちゃんが指差す先……私の寝ているベッドの傍らに、眠っているハヤテくんの姿が見えた。マリアさん曰く、付きっきりで私の看病をしてくれていたんだとか。

ハヤテくんは相変わらず、優しいなあ。夢とは違って、現実ではただの友達関係。ハヤテくんはナギちゃんの執事さんで、私はごく普通の女子高生だけど……今は何だか、それがとても嬉しく思えた。

ハヤテくん。夢でも現実でも、ありがとう。

「現実のハヤテくんも、やっぱりカッコイイね」

(おわり)

泉「兎に角？」

著者：明日の明後日

「ねーねー美希ちゃん、ちょっと訊きたいことがあるんだけど」

「おお、どうした泉」

ある日の放課後。動画研究部の一員、瀬川泉から何やら相談を持ちかけられた。

「これの読み方、分かる？」

言いながら泉は一枚の紙を差し出す。それを受け取って、そこに書かれている文字を注視した。

『兎に角』

……○○に、つの？

「これは、あれじゃないか。最初の文字の読み方が分からないけど、兎に金棒、的な意味の言葉じゃないのか」

私は国語が得意な方ではないので、漢字にはあまり強くない。とはいえ相談を受けた手前、よく分からない、で済ましてしまうのも癪に思えて、

似たような文字の並びをしている言葉をもとに、意味を推測しようと試みた。

「あー、確かに似てるかも！」

泉も納得してくれたようだ。これはきつと、兎に金棒、ヒナに木刀といったように、強いものに武器を与えることで更に強くなる、みたいな感じの言葉に違いない！

「おいおい、何を言ってるんだお前たちは、それは全然意味が違う言葉だぞ」

と、後ろから不意に声を掛けられる。

「む」

振り向けば、そこにいたのは同じく動画研究部の一員、朝風理沙。

しかし、全然意味が違うとは一体どういうことだ？確かに、理沙は私たち三人の中では一番成績がいいが……

「理沙ちゃん、もしかしてこれの読み方、知ってるの!？」

問う泉に、理沙はチツチツチツ、と指を振って、

「いや、悪いが読み方までは分からない。しかし、意味を推測することならできるさ」

何やら無性に腹が立つ振る舞いではあったが、しかし、意味を推測するというのなら、私の推測だってそれなりに的を射てるはずと思うのだが。

「お前たち、変だとは思わないのか？漢字の中に、一字だけ平仮名が混じっていることを」

「…ハッ!!」



た、確かに！『兎に角』、この言葉は最初が『兎』、最後が『角』という漢字で書かれているにもかかわらず、真ん中の『に』は平仮名で書かれている！！

「い、泉！確かに、この言葉は、この書き方で間違いなのか!?」

逸る私に、泉は「えっとおー」とこめかみの辺りに指を当てながら考えている。この言葉を見た場面を思い出そうとしているのだろう。

「昨日、20やんで小説を読んだときに出てきた言葉で、確かに、この字だったと思うよ？」

それを聞いて、理沙は「ハッ」と鼻を鳴らす。

「その作者はきっと変換ミスをしたんだろうな。一つの単語で、平仮名が漢字に挟まれるなどあるはずがない」

な、なんとという説得力…！確かに、理沙の言う通りだ、現に私の知っている言葉の中で、漢字の中に唯一つだけ平仮名が混じっている言葉なんてありはしない！！

「この言葉はな、正しくはこう書くんだよ、きつと」

理沙は私の手から紙を奪い去ると、もともと書いてあった『兎に角』という文字を二重線で消して、その横にこう書いた。

『『兎煮角』……どういう意味だ?』

「ふつ、逆から呼んでみれば分かるさ」

「えーつと、つの、にる、なんとか」

見慣れない言葉を目に、問う私。答える理沙。素直に逆から読み上げる泉。

「つの、にる…角、煮る…角煮」

「角煮、角煮か!!」

豚肉なんかをブロック状に切り分けて、甘めのタレでとろとろになるまで煮込む、あの料理のことか!!

「そうだ！この言葉はきつと、読み方が分らんが、『兎』という動物の肉の角煮を意味しているんだ!!そうに違いない!!」

完璧だ、完璧すぎる…!

漢字の間に平仮名が挟まれるような単語がある訳がない、という推測から始まり、『に』に『煮』を当てはめ、後に続く『角』とあわせて『角煮』まで連想するとは…

「て、天才だ…天才がここに光臨した…!」

「さすがだよ理沙ちゃんつ。これで動画研究部は安泰だね、美希ちゃん！」

「ま、私にかかれればこんなものさ。後はこの『兎』という字がどんな動物を表しているかさえ分かれば、この問題は解決だな」

言いながら、理沙はスマートホンを起動する。なるほ

ど、読み方が分からないなら手書きで文字を入力して、グ○グル先生に読み方を訊けばいい、という寸法だな？ まったくこの女、やることに隙の欠片もない。完璧すぎて溜息が出てしまうというものだ。

「あれ？あんたたちまだ帰ってなかったの？」

と、理沙が『兎』の読み方を検索している最中に、我らが担任教師がやってきた。見回り、というほどの時間でもないから、忘れ物でも取りに来たのだろうか。

「おお、雪路か。何、ちよつと調べごとをな」

「ふーん。ま、いいけど。それよりあんたたち、来週の試験、大丈夫なんでしょうね？今度赤点取ったらいくらなんでも庇い立てできないんだからね？」

「任せる雪路、我々もそろそろ本気を出してもいい頃合だからな」

「〃とかく〃赤点さえ取らなければいいんだよね!!」

理沙には検索に集中させるべく、雪路は私と泉で相手取ることにした。それにしても、もうすぐ中間試験か、まったく嫌なことを思い出してしまったことだ。

しかし、泉の言うとおり、赤点さえ取らなければいいのだ。そしてそのためには、一問一答の問題を落とさな

いこと。

要は暗記だ。それだけに意識を集中すれば、さして難しい問題ではない。範囲を考えると一夜漬けでは厳しいが、一週間もあればなんとかなるだろう。

「まったくあんた達は、意識が低いんだから……〃とかく〃あんた達の点数が低いと、私がヒナに怒られるんだからね、しっかり勉強しなさいよ」

言いながら雪路は教壇から出席簿を取って教室を出て行った。しかし、出席簿って朝に提出しないといけないのではないだろうか……？

「よし、分かったぞ！」

と、理沙が大声上げて立ち上がる。どうやら、『兎』の読み方が分かったらしい。

『兎』という字は、どうやら『うさぎ』と読む様だぞ!!」

「おお！」

ということはつまり、

「そう、『兎に角』とはウサギの肉の角煮のことだったのさ!!」

「おおく〜!!」

パチパチパチ、と泉と二人で拍手をしながら理沙を讃える。

昔はうさぎを食べるような習慣があったとどこかで聞

いたことがあるし、きつとウサギの調理法の代表的なものが角煮なのだろう。

「ありがとう、理沙ちゃん!!これで謎はすべて解けたよ!!」

目を輝かせ、理沙の手を取りながら感謝の意を示す泉。

「何、この程度のことならお安い御用さ。また、いつでも頼ってくれて構わないぞ、泉」

理沙は得意げな顔で言っただけ。確かに、今日の理沙は嫉妬するほどに冴え渡っていたな。

「よし、泉の疑問が晴れたところで、次のターゲットは中間試験だな、準備はいいか、二人とも!!」

しかし、今日の勝利に酔いしれていては明日の勝利はない。勝って兜の緒を締めよ。上を目指すためには、油断している暇など、ありはしないのだ!

「もちろんだよ美希ちゃん!」

「ああ、これから三人で勉強会だ!応用問題は諦めるとして、＼とにかく＼簡単などころから覚えて覚えて覚えて覚えて覚えて覚えて!」

理沙が吼える。これからの三人の方針を、たった一声で決定してしまった。まったくどうしたっていうのか、今日の理沙は絶好調だな。

私も負けていられない。前回の試験では総合得点で理沙に敗北を喫したが、いつまでも負けてばかりはいられ

ない。次は必ず勝ってやるぞ!!

「よし、そうと決まれば生徒会室へダッシュだ!行くぞー!!」

「おー!!!」

私たちは、三者三様、明日の勝利へと向けて、走り出した。

生徒会室にはヒナや千桜を始めとした成績優秀組がいるだろう。

きつと怒られるだろうけれど、＼とにかく＼彼女たちに勉強会の監督をお願いするところから始めなければ。

・
おわり
・

修学旅行レベル4

著者・R I D E

「ここがレベル4の勤め先か…」

修学旅行の引率として、薫京ノ介は生徒二人を引率してきた。

勤め先は、とある工場。

今日から7泊8日、この工場で働くのだ。

現在、8時10分。この工場の始業時間20分前。

「白皇学院生徒、竹崎です」

「モブです」

「彼らの引率の薫京ノ介です。本日はよろしくお願いします」

社長室で薫は生徒共々、工場の経営者に頭を下げた。

「は、はい、よろしくお願いします」

経営者は忙しなく挨拶を返した。まさかあの白皇が、自分の工場で職場体験をしたいと言いだすなんて思いもなかった。

しかし助かったのは事実だ。この会社は現在生産が間に合わず、納期が遅れに遅れをとっている状況なのだ。少しでも生産ペースを上げなくてはいけない。

「それじゃあ、現場に案内するから工場長、案内してください」

経営者はそう言って、後ろにいる工場長に薫たちを任せた。

「それじゃあ、ついてきて下さい」

工場長は疲れたような声で促した。

薫たちは黙ってついていく。

案内させられたのは、清潔感漂う場所。工場長は隅にかかっている3着、帽子と服を取り出した。

「この工場では作業者はこれに着替えてもらうから。あ、上から着込む形で結構です」

生徒たちはどんな仕事でも対応できるよう一応ジャージを着ていたのだが、それが決まりがあったなんて知らなかった。

だがこの工場はそもそもその制服が作業着みたいなものであるため、なんでこんなものを着るのか疑問ではあったが。

作業着を着た後、工場の中へと案内された。

あれが旋盤機械、あれがマシンングセンタ、と色々な機械を説明されたが、生徒たちには何が何だか分からなかった。ただ、薫は興味津々に動いている機械を見ていた。プラモデルづくりが好きな彼はこう言うものが好き

なのだろうか。

そして、生徒たちはあるスペースへ案内された。

「君たちは、ここでは働いてもらうから」

そして、このスペースの担当者に説明を任せた。

「君たちは、出来上がった商品の仕上げをやってほしい」

目の前にあるのは、仕上げ前の金属製品。バリなどの削り残しが目立っている。

「これらのバリなどを取ったり、図面を見て穴にネジ穴を入れたりしてください」

そう言い、竹崎たちにヤスリを持たせる。

「ネジ穴入れるときは機械使うから、説明するよ」

指したのはタッピングボール盤と呼ばれる機械。これの説明をざっくりと説明された。

はっきり言って、竹崎たちは理解できなかった。使い方ぐらいしかわからない。

それでも、これぐらいのことは覚悟していた。

「それじゃあ、始めようか」

有無を言わず仕事を促す作業員。竹崎たちは仕方なく始めることにした。

「それでは、後は任せます」

薫はこの場を任せて去ろうとするが…。

「あ、先生。先生は別のスペースでやってもらいたいこ

とが…」

薫は思わず足を止めてしまう。

「な、なにを…」

「先生はケーブル作成をやってもらいたいのですが…」

「はあ!？」

声をあげずにはいられなかった。

「わ、私はそんなこと聞いていませんが…」

「ですが、理事からはあなたも使っていていいと言われてましたので…。体育教師だから、体力はあるぞと」

なんだそれは。確かに俺は体育の担当だが、休日はガンプラ作っているインドアだぞ。体力あったら雪路に翻弄されるか。

薫は叫ばずにはいられなかったが、その間も与えず連れて行かれるのだった。

竹崎たちは作業を進めていた。

ほんの少しの指導だけでヤスリのかけ方をマスターし、タッピングボール盤も危なげない使い方をしている。流石は白皇学院の生徒だ。

多少慣れないところはあるが、それも目をつむるくらいだ。

竹崎たち当人も、初めてやる仕事に興味の方が強く、

熱心に仕事していた。

最初の、うちは。

仕上げなくてはいけない量が多いのだ。仕上がっていくペースよりも、貯まってくペースの方が速い。

加えて、できることが限られているのだ。これではなかなか進捗しない。

それでも、竹崎たちはせっせと仕事した。貯まってくる品物にストレスを募らせながら。

そんな中で、途中休憩を挟みながら現在、時刻は23時30分。

「よ、ようやく終わった：」

本日分の量が終わり、竹崎たちはようやく一息つけた。

定時は17・30。しかしそれよりも6時間オーバーしての働きだ。

「おー、おまえたちも終わったか」

そこへ、ケーブルを作っていた薫も入ってきた。こちらにもくたくたの様子であった。

「それじゃあ、宿に戻るぞ。明日も、というか修学旅行中は朝早いからな。すぐに寝ろよ」

工場から宿へは薫の車で移動する。へとへとに疲れた薫の運転で無事に宿へ着けるか竹崎たちは心配だった。

とはいえ竹崎たちも疲れているので、そこまで深く考

えずに薫の車に乗り込むのであった。

2日目。

昨日の疲れを残したまま再び仕事場へ。かなりの量を昨日仕上げたのだが、それでも量は減っていない。

むしろ、昨日生産された品物も合わせて増えている気がする。

そして竹崎たちは仕事を始めた。昨日と同じ仕事を。作業の仕方は昨日で完全に覚えたので、昨日よりも多

くの量をこなそうと心の中で目標をたてていた。深夜まで続け、目標は少しだけ達成できた。ただ、少

し量が上がっても傍から見てもそれは焼け石に水の様であった。

竹崎たちは、あんまり充実感を得ることなく2日目を終えるのであった。

3日目

さすがにこれほど時間が立つと工場の作業者とそれなりに親しく会話ができるようになる。

昼食時、竹崎たちは作業者たちと一緒に食事をとって

いた。

その会話も、驚きの内容であった。

「じゃあ、この3ヶ月間給料が全く支払われていないんですか？」

作業者は、困ったように頷いた。

「ああ。何か投資先とトラブルがあったらしくて賃金の調達ができていないらしいんだ」

「金のことについては俺たち良くわからないけど、給料貰えないってのはなあ…」

給料の支払いは決まり事みたいなものだ。それがなされていけないことは、その会社がいかにも危険かよくわかる。

しかも更に、とんでもないことがあった。

「そんな状況なのに、上は設備投資しようと言いだしたんだ」

「ええっ!？」

そもそもその始まりは、ある仕事を受注したことからだった。

もともとの会社はワンオフの製品を作っていたのだが、その案件は複数の品物を作ってくれということだった。

会社側はこれを機に、量産体制へと切り替える方針を出したのだ。

しかし、仕事がないうちなら対応できるかもしれない

が、仕事が来てからの転換では対応することは当然難しい。元々一品モノばかり作っていたところから急に量産しろと言われても、生産力は急には上がらない。底上げぐらいならできるかもしれないが、何倍も上げろというのは無謀な話だ。

だから、必然的に生産は間に合わない。生産が遅れば納期も間に合わない。そうなれば利益も貰えない。そして体制なんて変えることはできない。どんどん負の方へと進んでいく…。

それを打開するため、まずは生産力を上げるといふことなのだ。

理屈はわかる。だが、この状況でそれをやることはないだろう。賃金未払いが続いているのだから、これを解決できることから探したほうがよいのではないだろうか。「そんな状況で、よくこの工場で働き続けていられますね」

ある意味聞いてはいけないような質問を、思わずしてしまった。

「まあ、仕事だからね…」

その言葉には、計り知れない苦勞などが含まれているのを感じた。

「さあ、昼休みは終わりだ。ここからまた頑張ろう」

3日目が終わわり、4日、5日、6日と日が経っていく。

その間に竹崎たちがやったことは、製品の仕上げのみであった。

この工場にはもっと面白い工作機械もあったのだが、それには触らせてもらえなかったのだ。

仕上げばかりしていると、自然と他の機械を動かしたくなる。のだが、危険だから動かさせてくれないのだ。

こうなると、ストレスがたまってくる。しかし、そうは言っていられない。同じような人がいるのだ。

但し事情は違う。ある人はロクに経験を積めないまま次の機械、次の機械と担当を転々とさせられているのだ。曰く、工具をセットするだけで加工は機械が自動でやるから、君でも大丈夫だと上に言われたが、説明が不十分なうえにメインの機械を任されているのでプレッシャーはかかる。何かトラブルが起こったらどうすればいいのか。

作業員が何をすればいいのかわからない。それは上司が上手くやることを説明できていないあかしであり、組織としては致命的な問題でもある。そのために社員が育たないということにも繋がるのだ。

ブラック企業はこういうところなのか、と竹崎たちは

深刻な現状をその身に思い知らされるのであった。

そして7日目。

今日がこの工場で働く最終日だ。

竹崎たちは最後までしっかりと働いた。正直ここまで来ると身体の方も慣れてしまっている。

とはいえ、集中力を持続するところまでは一長一短ではできない。疲労もたまっているのでどこかで切れてしまうのが当然だ。

それでも、竹崎たちはしっかりと作業を行った。

終わった時には、達成感よりも疲労感で一杯になった。七日間ケール作っていた薫も疲れていた。

帰るのは深夜、食事してシャワー浴びて、寝るのは日付が変わった後。休まる時間は少ない。

そんな中で、毎日やっているのだ。休日出勤など当たり前で、サービス残業など頻繁だ。

でも、それは組織の体制がそうさせるのである。組織の体制が不十分だとこういう状況に陥ってしまうのだ。

環境に適應できない組織が、ブラック企業になるのだ。竹崎たちは、そのことを良く身に染みるのであった。

8日目。

最後はディズニールランドで遊ぶ竹崎たち。

いい気晴らしになった。

竹崎たちも、何故か働かされた薫にとつても。

ちなみに薫が働かされた工場にはケーブルブルだけでなく部品の組み立ても行っていた。ガンプラ作りを趣味としている薫にとつてはそっちの方をやりたかったが、彼はケーブル作りしかさせてもらえなかった。

だから薫もディズニールランドでストレス発散させている。はっきり言って、竹崎たちよりも楽しんでいる。

「あー、楽しいなあ」

普段の薫とは少し違うはしゃぎように、竹崎たちは少し戸惑う。

そんなにストレス溜まっていたのだろうか…。

まあ、ガンプラ一つですぐに復帰できると思うから大丈夫だろう。

こうして、修学旅行レベル4は終わったのであった。

時計塔の誓い

著者…瑞穂

注)…このSSでは原作の時系列を無視してください。それからヒナギクさん、千桜さんたちは既にゆかりちゃんハウスに入居しています。また生徒会顧問に薫先生を充てています(著者が勝手に決めた)。そのあたりに気をつけて読んでいただければ幸いです。ではどうぞ。

ここは白皇学院生徒会室。

桜の開花も間近な三月半ばの昼下がりに、春休みを前に生徒会では会長の桂ヒナギクと副会長の霞愛歌、それに書記の春風千桜の3人が今日も大量の書類と格闘していた。本来は泉、美希、理沙とあと3人も生徒会役員がいるのだが、困ったことにいずれもサボりなのでこのSSには殆ど登場しない。

「どうして新学期前なのにどうしてこんなに仕事があるのかしら。いくら自治権限が広いからって、理事長があるんだからって、学校の運営を生徒会に任せすぎじゃないかしら？」

「それだけ信頼されているってことよ」

ヒナギクの愚痴に愛歌が答えていると、エレベーターの上がってくる音が聞こえる。

誰かしら、とヒナギクが呟いているとノックする音が聞こえた。入室を許可すると入ってきたのは三千院家別邸の、三千院ナギの執事で現在はゆかりちゃんハウスの執事を勤めている綾崎ハヤテであった。

「失礼します。先生に頼まれて書類を持ってきました」

「いつも悪いな、綾崎君」

千桜が口を挟んだ。

「ありがとうハヤテ君。そういえばいつもハヤテ君に手伝ってもらっているわね。書類を持ってきてくれるだけでなく紅茶まで淹れてくれるし、他にもいろいろ手伝ってくれるわね」

「いえいえ、たいしたことではありませんよ、ただ頼まれただけです。それでヒナギクさん、他に何か僕にできることはありませんか」

いつものように生徒会の手伝いをしようとして申し出て、生徒会の面々も受諾したのでその日の夕方までハヤテは書類の分類など、仕事を誰よりも早く、そして手際よく進めたのであった。

数時間後——4人は今日の活動を終えて寛いでいた。

「ありがとうハヤテ君。おかげで助かったわ」

ハヤテに淹れてもらった紅茶を飲むヒナギクたちの顔には笑みと安堵の表情が浮かんでいた。

「いえいえ、仕事が全部終わってよかったですよ」

なんとたった数時間で数十センチはあろうかという書類の束を片付けてしまったのであった。普通ならばできるはずがないのだ。そう、普通ならば。いくら4人がかりとはいえ、これだけの仕事量をこなすのははつきり言うて難しい。愛歌の体が弱いことを差し引いても、各自が超人的な能力を有しているからなのだろうか。ハヤテは先述のとおり三千院ナギの執事を勤めているが、実はそれだけではなく過去に家族を養うために年齢を偽ってまで様々な職種の仕事を経験しており、ヒナギクは文武両道、公明正大なので入学直後から生徒会長を任せられており、愛歌は前述のとおり体は弱いヒナギクに次いで頭脳明晰であり、千桜はアルバイトでメイドを務めている為に動きが俊敏であり手際が良いからこれだけの仕事をこなせるのだ。

「それでは僕はこれで失礼します。また何かあればお手伝いさせていただきます」

「そ、そんな悪いわよ。でも手を貸してほしい時にはよろしくね」

「はい、では」

そう言ってハヤテは生徒会室を後にした。

ふーっ……溜息をつきつつ天井を見上げるヒナギクは仕事が捗ったことには安堵していたが、何か物足りないと感じていた。

「どうしたヒナ？」

千桜の問いかけにヒナギクは答えず、代わって愛歌が

「私たち3人だけじゃ足りないから、誰かに生徒会に入ってもらいたいの？」

「な、なんで私の考えていることが分かったの!？」

ハヤテに生徒会に入ってもらいたい、一緒にいたい、という胸の内は知られたくないヒナギクであった。

「なら、綾崎君に生徒会に入ってもらったらどうだ？」

千桜の思い掛けない発言に、助け舟を出したことに2人は驚きと喜びの表情を浮かべていた。

「そうね……実際に活動しているのは私たち3人だけだから、メンバーになってくれれば助かるわね。ハヤテ君にはいつも手伝ってもらっているけど手際もいいし。何より仕事について楽しいわよね」

「ヒナ、どうにかして入れることはできないかしら？」

「……なら、生徒会長推薦で入会してもらいましょうか」
この時ヒナギクの頭の中に、とある考えが浮かんだのであった――

翌朝――

いつものようにハヤテがゆかりちゃんハウスで朝食の支度をしていると、後ろからヒナギクに声を掛けられた。

「おっはよ！ ハヤテ君、ハル子、ナギ！」

「おはようございます、ヒナギクさん」「おう、ヒナギクじゃないか。おはよう」「おはようヒナ」

4人がお互いに挨拶を交わしていると、ヒナギクがおもむろに用件を切り出してきた。

「ハヤテ君、今日の放課後に生徒会のこととちょっと相談があるのだけどいいかしら？」

「はい構いませんよ、放課後ですね。お嬢さまよろしいでしょうか？」

「別に構わないが、ヒナギク、なんで放課後なの？ 今じゃダメなのか？」

「ええ。ちよっと長くなるし大事な話なのよ。ここでも教室でもできない話なの、お願い」

真剣な様子で揉み手をして頼んでいるところを見ると、どうやら真面目な話らしい。

「まあいい。だがあまり遅くなるなよ。ハヤテには執事としての仕事もあるんだからな」

「ありがとうナギ。じゃあハヤテ君、ハル子。また学校でね」

「分かりました」「ああ、またなヒナ」

そして時は流れ、放課後――

ハヤテが時計塔のエレベーターを最上階まで上がりノックをして生徒会室に入るとそこには見慣れた風景が漂っていた。

「失礼します」

ヒナギクだけではなく、既に千桜や愛歌も来ていた。

「あら綾崎君、今日はどうしたの」「こんにちは綾崎君」愛歌と千桜はただ挨拶を交わしたただけであったが、これから何があるかは心中分かっていた。

「ハヤテ君よく来てくれたわね。それじゃあ早速本題といきましょうか」

「それでヒナギクさん、相談って何ですか？」

ハヤテにとつて普段の仕事の手伝いでもなければヒナギク、愛歌、千桜の3人が相談することなど思い当たる節はない。それに全員僕より成績がいいのでましてや勉強についてではないだろう。

4人が席に着くとヒナギクさんは一同を見回しておもむろに口を開いた。

「ハヤテ君、生徒会に入ってくれないかしら？」

「えっ、僕が生徒会にですか……でも何故ですか？ ヒナギクさん達の他にも瀬川さん達がいるじゃないですか。」

6人もいるのにどうしてですか」

「泉達はサボっているから生徒会は実質、私たち3人しかいないの。3人だとちょっと苦しいけどハヤテ君がいれば4人で仕事を回せるし、それに今でもハヤテ君を含めたこのメンバーで仕事しているときがあるけど十分効率的だからね。どうかしら、ハヤテ君？」

真剣な表情で頼むヒナギクに、残る2人にも真剣に見つめられたハヤテだが、

「僕は三千院家の、ナギお嬢さまの執事なのですよヒナギクさん。生徒会役員になるのはいいとして、お嬢さまやマリアさんに聞いてみないと」

「ということは生徒会役員になることには反対しないのね」

「はい、マリアさんたちが許していただければ問題はありません」

「分かったわ。ならば今日帰ってから2人と相談してみてもいい」

「暫く俯いていたハヤテだが、

「はい、分かりました。ではヒナギクさん、返事はいつまでにすればよろしいでしょうか」

「……うーんそうね……明日までにお願ひできるかしら」

「分かりました、明日ですね。相談とは以上でよろしかったでしょうか」

「ええ。今日は以上よ。愛歌とハル子も今日は他に仕事もないからあがっていいわよ」

こうして今日の活動は終了し、全員が下校した——

その夜ゆかりちゃんハウス——

ハヤテとナギとの間で少々揉めたが、マリアの賛成もあってハヤテを生徒会に入会させることになった。但し執事に支障が出ないように、という条件は付いていたが。そして翌朝、白皇学院にて——

「ヒナギクさんたちの頼みであれば喜んで。皆さんのお力になれるように頑張ります！」

とハヤテは二つ返事で、笑顔で了承したのだった。

「よかったわ、ありがとうハヤテ君！ これからもよろしくね」

「だけどヒナギクさん、気になることが」

「ん、何かしらハヤテ君」

「他の生徒の皆さんに内緒で、同意なしで決めていいの

でしょうか？」

「それは大丈夫よ、生徒会長に任命されれば基本的に異論はないからね。生徒会長推薦よ」

「ならば大丈夫ですかね。ではこれからもよろしくお願ひします」

——こうして綾崎ハヤテは生徒会会計として桂ヒナギク、霞愛歌、春風千桜の3人とともに白皇学院生徒会に入つたのであつた——

それから一か月後——

「ところで僕たち、いつも一緒にいますよね。できれば皆さんとずっと一緒にいたいですよ」

「そうね。それは私も同感よ」

ハヤテとヒナギクのやり取りを聞いていた愛歌は爆弾を投下することにした。

「だったら、ヒナと綾崎君が付き合ったら？」

それを聞いた2人は吹き出した。

「な、何言っているのよ」

「そ、そうですよ」確かにヒナギクさんは綺麗で成績優秀で公明正大な方ですけど、僕なんかと釣り合うかどうかどう

か……」

実はヒナギクは二か月近く前の『ひな祭り祭り』に、自分の誕生日にハヤテへの好意に気がついたので、負けず嫌いが災いして自分から告白したら負けだと思ひ込んでいる。

「そういえば私たち、ハヤテ君が生徒会に入ってから何かしてあげられたかしら？」

思い出したかのようにヒナギクが口を開いた。

「どういうことですか？」

「そのままの意味よ。私たちはハヤテ君が役員になる前から仕事だけじゃなく紅茶汲みとかいろいろと手伝ってもらっているけど、私達からはハヤテ君に何もできていないじゃない」

「そんな事ありませんよ、僕が忙しい時には皆さんが代わりに仕事してくださいまし、僕が分からないことにつきましては皆さんが懇切丁寧に教えてくださっているじゃないですか」

「そういう意味じゃないの。先日新入生に対して私たちが入学のお祝いしてあげたように、ハヤテ君に対しても入会のお祝いしてあげたいのよ」

「そ、そんなの結構ですよ」

「そんな事言わないの。じゃあこうしましょう、私たち皆で合唱して絆を深めましょうか」

「合唱ですか？」

「そうだな。皆がひとつに纏まるには団体行動が一番だからな。合唱コンクールは経験上、特に効果的だ。このSSの著者も言っているからな」千桜が言葉を紡いだ。

「私は構いませんよ」

「いいわよ、私も」

「私もいいぞ」

「……それじゃあよろしくお願いします」

愛歌、ヒナギク、千桜が賛成したため、ハヤテも同意したのであった。

「それで曲目はどうします？」

すると愛歌が口を開いた。

「そうね……それじゃあこのSSの著者が中学校時代に合唱コンクールで特に印象に残っている曲にしましょう。」

『時の旅人』『大地讃頌』でいいかしら」

時の旅人

<https://www.youtube.com/watch?v=ou87FfXluSU>

(楽譜)

<https://www.youtube.com/watch?v=vN9xe-sscVQ>

大地讃頌

<https://www.youtube.com/watch?v=121pCTmP5q4>

(楽譜)

<https://www.youtube.com/watch?v=MO-h-8e6oZA>

「まあいいわ。ポップスでもいいけど絶対に著作権に引っ掛かるから」

こうして生徒会の面々は合唱して絆を深めることにしたのであった。

「それから気になったのだけど、パートについて指揮者はヒナ、ソプラノは私、アルトは千桜、テノールは綾崎君として、バスは誰が務めるの？」

「そうよ、それにピアノは誰が弾くの？」

愛歌とヒナギクの疑問にその場の空気が凍ってしまった。

「うーん……ならばバス・パートは生徒会顧問の薫先生に、ピアノはお嬢さまに頼んでみては如何でしょうか」

ハヤテの提案に他の全員が目の覚めるような表情を浮かべるのであった。

「それは名案ね。でも合唱するのが薫先生を含めて4人しかないから、あの子達にも入ってもらった方がいいと思うのだけどうかしら」

『生徒会の絆を深めるため』なのでヒナギクの提案に全員が賛同したのであった。

薫先生についてはすんなりと了承してもらえたが、ナギについては骨が折れた。

「何故私がお前たちの為に弾かなければならないのだ！」

「そんな事言わずにお願いします、お嬢さま。僕たちの合唱に付き合ってください、他に弾ける方はいないので」

「お願いナギ、私たちに付き合ってください」

「ナギ、ピアノを弾けるのはお前しかいないんだ、頼む」

「ナギ、ピアノを弾ける方が他にいらっしやらないので弾いてあげてください」

ゆかりちゃんハウスに帰ってきてから、マリアの援護射撃を受けながらハヤテだけではなくヒナギクや千桜たちもナギに頼みこみ、数日間かけて漸く受け入れてもらった。

「……分かったよ、弾くからそんな大げさな頼み方するな！」

「あ……ありがとうございますお嬢さま」

「ありがとうナギ」

「ありがとう、そしてよろしく頼む、ナギ」

最終的なパートについて指揮者はヒナギク、ピアノはナギ、ソプラノは愛歌と泉、アルトは千桜と美希、理沙の3人、テノールはハヤテ、バスは薫先生に決まった。生徒会室にピアノが持ち込まれ、生徒会の仕事が終わってから毎日ナギと薫先生を交えて全員が一月後の本番に向けて練習するのであった。

どうしても最初は歌詞を覚え音を合わせる為に自然と声量が小さくなるものだが、ヒナギクとハヤテの激励により段々大きくなり、恥じらいも薄れていった。ナギも最初は合唱している皆の士気が低かった為に不満を露わにしながら演奏していたが、歌詞を覚え声量が大きくなるにつれて不満は解消していき自然とピアノを弾く指が動くようになっていった。

但しパートごとに音程の高さが変わる部分があり、アルトとテノールは特殊な部分があるので覚えるのにやや手間がかかった。それでも『絆を深める為に』『ハヤテ君をお祝いする為に』練習していく中で、歌を通して皆が纏まっていき、自然と皆の和ができるのであった。

「はい、こうして皆さんと一緒に歌えて凄く楽しかったですよ。ヒナギクさんや千桜さん、愛歌さんは勿論、瀬川さん、花菱さん、朝風さん、薫先生にお嬢さまにも協力していただいたのでここまでできたのだと思いますよ。皆さんと団結できなかったら合唱は成功しなかったでしょうし、こうして充実感を得られなかったでしょう。皆さんお疲れ様でした。そしてどうもありがとうございますました」

最高の、と言っても過言ではない笑みを浮かべるヒナギクの慰労の言葉にすぐさまハヤテが反応して、彼も幸せそうな笑顔で全員に慰労と感謝の言葉を述べ、全員と握手を交わしたのであった。

「綾崎君、そこまで言われると恐縮しちゃうよ。ああでも、こうして全員で成功を、幸せを実感できてよかったな。皆お疲れ様」

「そうよね、そこまで言わなくてもいいのに。けど確かにこうして充実感を感じるの嬉しいことよね。お疲れ様」

「ハヤテ、お前は相変わらずだな。だが無事に成功したのだからよしとするか」

(ナギ、ちよつと高飛車よ)

千桜、愛歌、ナギに続き泉たち3人娘と薫先生も笑みを

浮かべ、お互いに慰労と感謝の言葉を述べて、合唱コンクールは幕を閉じた。結果、皆の絆が確固たるものになり以前より和が深まったのであった。外は茜の色に染まっていた――

しかしヒナギクの様子はまだ終わっていない。

慰労会後の生徒会活動も済み、ヒナギクとハヤテは2人きりで生徒会室にいた。因みに愛歌、千桜とナギ、そして泉たち3人娘は既に下校している。

ハヤテはヒナギクに「話があるから残っていてほしい」と言われたのであった。

「ヒナギクさん、話って何でしょうか」

尋ねるハヤテの表情はいつもとそれ程変わらないが、ヒナギクの方は紅くなり俯いている。

「ヒナギクさん……?」

「ハヤテ君、貴方に打ち明けたいことがあるの。実は……」

考え込んでいたが意を決して真っ直ぐハヤテの顔を見た。ハヤテも釣られて真剣な表情でヒナギクを見た。

「ハヤテ君、貴方のことが好きです。私と付き合ってください」

ださい！」

とうとうハヤテに向かって自分の想いを伝えたのであった。

「ヒナギクさん……ちよつとこちらに来てくれますか？」

「え……？　ちよつとだめよテラスは！　私が高い所苦手だつて知っているでしょ！」

「はは、大丈夫ですよ」そう言いつつ、ヒナギクをベランダに連れ出した。

「ヒナギクさん、まずはひな祭り祭りのように外の景色を見てください」

ハヤテはまず、ヒナギクの心を落ち着けることにした。

その言葉に従い、ヒナギクは閉じていた目を開けると――

「すごく綺麗ね」

あの時と同じように、藍色に染まりつつある空に素晴らしい景色が2人の目に映るのであった。

「綺麗な夜景ですよね、ヒナギクさん」

「ええそうですね、ハヤテ君」

そうは言いつつ、告白の返事をまだ貰えていないので焦燥感に駆られていた。

ベランダから夜景を見ていた2人であったが、やおらハ

ヤテがヒナギクの方を向いた。

「ヒナギクさん、こちらを向いてください」

「なによ……」

「僕もヒナギクさんのことが好きです!!　優しくて公明正大なヒナギクさんとずっと一緒にいたいんです。

いつでもどこでもどんな状況でも助けに行きます。こちらこそこんな僕ですが付き合ってください!!」

「あ……ありがとうハヤテ君……!!　私もいろいろと迷惑を掛けることもあるけれど、これからはずっとよろしくね!!」

そのようにお互い永遠の誓いを立て、唇を交わして抱き合う2人なのであった。

こうして漸く2人は結ばれた――

Fin

アリスの部屋 38 (サンバ)

著者：ロッキー・ラックーン

あんまりにもあんまりな振る舞いのため、サファイアに見限られた元マスター。実はヒナギクと同じ声のため、変身した時に魂が乗り移った模様。

【まえがき】

今回もハヤテ以外のキャラクターが登場するのと、声優さんネタがやたらありますので、本文の前にご紹介からとなります。

「マジカル・サファイア」…今回のアリスちゃんの依頼人(杖)。Fateシリーズのスピノフ、「プリズマ☆イリヤ」に登場する魔法の杖。子供のおもちゃにあるような魔法少女のステッキそのままの外観。とても真面目でクールであるが、主人であるルヴィア(後述)があまりにも酷い振る舞いのため、見限って他の少女と契約したという経歴を持つ。

「天上天下唯我独尊金髪縦ロール(以下略)」…「プリズマ☆イリヤ」に出てくるルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトを指す。ライバルである遠坂凜(実は咲夜と同じ声)と幾度と無く無意味に争って戦ってばかりだったことや、

「問おう、貴方が私のマスターか?」: Fate シリーズの英霊、セイバーの名セリフ。約束された勝利の剣(エクスカリバー)なる宝具の剣を持つ少女。実はアリスちゃんと同じ声。

また、ハヤテ側の登場人物の関係は連載中の「しあわせの花 Cuties」から引っ張って来たもので、ハヤテとヒナが恋人同士という事になっております。それでは、本編へどーぞ!

【アリスの部屋 38 (サンバ)】

ごきげんよう、アリスでございます。今宵も悩める子羊の相談事を一刀両断!見事に解決して差し上げますわ。早速、ご依頼人の登場です。

「それでは迷える子羊さん、どうぞ」

「こんにちは、マジカルサファイアと言います」

「えーと…サファイアさん？ごきげんようですわ」

押入れに入ってきたのは、青を基調とした魔法の杖です。そう、杖が話しかけてきているのです。アリスの部屋始まって以来の無機物の依頼人ですわね。

「はじめましてアリス様。貴女は剣士としての高い潜在能力をお持ちのようですね」

「問おう、貴方が私のマスターか？ですわ♪」

お約束のやり取りもそこそこに、早速彼女(?)のお悩みを打ち明けてもらいます。

「私の悩みは『姉』についてです」

「サファイアさんにはお姉様がいるんですか」

魔法の杖に姉妹だなんてあるのかという野暮なツッコミは飲み込んで、続きを聞きます。

「はい。破天荒で、自分が楽しければ良いという人(杖)で、望んでいない人と強制的に魔法少女の契約をさせてしまう困った姉です」

「妹の貴女はすごく冷静で思慮深く見えますが…真逆な感じのお姉様なのですね？」

「はい。自分で言うのもナンなのですが…」

真人間の妹とハチャメチャな姉…どこかで聞いたようなお話ですわね。それも私のごくごく身近で。まあ私は縁の遠い話なので、適任の助手を呼ぶ事にしましょうか。

「私には兄弟がいまませんからそういった感覚は分かりませんわね…あ、そうですわ!」

パチン

「アリス、呼んだ？今日はお仕事の日だったわよね？」

指パッチンで現れたのは桂ヒナギク。この私の母親代わりを務めてくれてる、この部屋のヌシでもありますわ。破天荒な姉に困ってる者同士で悩みを共有する事で、

解決の糸口を掴んで貰おうという狙いですわ。

「ヒナ、こちらマジカルサファイアさんですわ。今回の私の依頼人です」

「え!? その杖が…?」

「こんにちは、マジカルサファイアと申します」

「わっ! 杖がしやべった!」

サファイアさんの姿に驚くヒナ。まあ無理もありませんが…。その失礼な態度には少し気にかかりますわね。

「ヒナ、私のお客様に失礼ですわよ。ちゃんとレディーとして礼儀良くご挨拶なさい」

「ごめんなさい。ちょっとビックリしちゃって…。桂ヒナギクです。はじめまして、マジカルサファイアさん」

「サファイアで結構です、ヒナギク様。よろしく願います」

私のお叱りに態度を戒めるヒナ。サファイアさんは、そんな事慣れた風にといった感じで挨拶をします。

「ヒナ、彼女は破天荒なお姉様にお困りのようですので

アドバイスをしてあげてくれませんか?」

「お姉ちゃんに困ってるの? 大変ねえ、気持ちはずつごく分かるわ!」

「ヒナギク様にもお姉様が?」

「ええ…とびっきり破天荒なのがいるわ…。じゃあコッチで少しお話ししましょうか?」

「はい、よろしく願います」

押入れから出てヒナのデスクに移るサファイアさん。早速それぞれのお姉さんのトンデモ話に花が咲いているようです…。

「妹って…大変よね、サファイアさん」

「ええ…分かってくれる人がいて嬉しいです」

あつさりと意気投合する二人（一人と一本）。まあ大変なのは妹なのではなくて、貴女たちだからなのでありますけど。

「ヒナギク様、私は貴女ととても気が合いました。もし良かったらですが、出会えた記念に私と仮契約を結んで、変身してみませんか?」

「えっ、それは是非やってみたいけど…大丈夫かしら？」
「はい。私は姉様とは違って、人を騙して魔法少女の本契約をしたりなんて事はありません。一時的に私とシンクロするだけなのでご安心を。私を手にとって、飛びつきの魔法少女っぽいポーズと共にご自分のお名前を口にしてみてください」

魔法少女に変身って…大丈夫なんでしょうか？魔法少女と言ったらローティーンか小学生と決まってるはずですが…。イヤな予感がしますわね。

「えーっと、じゃあいくわよ…。桂☆ヒナギク♪（ぶ〜。ロ〜）」

「マスター仮登録完了！コンパクトフルオープン！鏡界回廊最大展開！」

お約束の変身シーン…は割愛して私のサービスカットをお送りしますので、皆様どうぞ自由に想像してくださいな。

「新生カレイドサファイアアカッコカリ、プリズマヒナ！
爆誕です」

「うわー…16にもなってその格好はどなのかと思いますわよヒナ…」

想像通りと言いますか…なんというか…。無理があると言わざるを得ませんわね。

「オーッホッホッホ！この服を着こなすにも品格というものが必要なのですわ。この私のように！」

「フアッ!？」

いきなり何をトチ狂ったのか、ヒナの口から信じられない言葉が信じられない口調で出てきました。まるで天上天下唯我独尊金髪縦ロールおっぱいお化けみたいな…アーたんフアンの皆様安心してください、私の事じゃありませんわよ。

「なーんて気分がいいんでしょう！サファイア、私と貴女の相性はバツグンですわね！」

「は、はい。そうですがヒナギク様、その口調は一体…」

サファイアさんも私と同じ違和感を覚えて声をかけますが…当のヒナは聞く耳を持ちません。



「今なら誰と闘っても負ける気がしないほどの心の昂ぶりですわ！早速、憎きとおさか…じゃなくて愛沢咲夜をぶっ飛ばしに行きますわよ！」

「えっ、ちよつと…」

それにしても、ネタを知らない人を置いてけぼりにしすぎですわ！そもそもこれは私のお話だという事をわかってるのでしょうか？約束された勝利の剣でお仕置きもやむなしですわよ。

コンコン

「アーたん、お客様が見えてるって聞いたからお茶を…って、ヒナ!?なにその格好!?!」

「シエロ…じゃなくてハヤテ!?こここつこれはそのえーと…」

部屋に入って来たのは、この私の（強調）執事の綾崎ハヤテ。さすがにヒナの恋人とはいえ、こんな恥ずかしい姿を見たらさぞかし…

「すつごく可愛いですね！いい…いいですよ！」

「二ファツ!?!」

という私の期待はあっさりと打ち砕かれてしまいました。まったくこのバカップルは…。

「あの…よかったらその格好で僕の部屋に来てもらっても…?」

「え…オーツホツホツホ！ハヤテがそんなに言うのなら、行って差し上げるのもやぶさかではありません事よ！」

「やった！」

なんか私たちそっちのけでノロけている二人ですけど…後で覚えていらつしやい！

「サファイア、この衣装3時間ほど借りるわね」

「それは構いませんが…」

「じゃあ行きましよう行きましよう。チレレ…」

別のピンクの魔法少女みたいな笑いを浮かべてヒナを連れ去って行くハヤテ。残された私たちは、仕方なくハヤテの持ってきたお茶を飲んで落ち着きます。

「えーっと…魔法少女の衣装代はハヤテに請求しておきますわ」

「そうして頂けるととても助かります。魔法もタダではありませんので…」

そんなこんなで、借金に魔法少女衣装代として114,514円が追加されたハヤテなのでした。次回のアリスの部屋、お客様は藤吉晴美さんと吉野屋先生です。お楽しみに、ですわ♪

【おわり】

雲一つない星空の下、少しだけ冷たい風を浴びながら、一人夜道を歩く。

この世は昼と夜で姿を変える。なんていうことを、いつだったか聞いたような気がするが、なんとなく、確かにそうだな、という気分になってくる。昼間にあるはずの喧騒も、今はせいぜい遠くから車の走る音程度しか聞こえない。星明りのようにぼつぼつとまばゆい輝きを見せる街灯も、この暗がりの間だけその姿を現してくれる。……まあ、夜が違う世界というのは、以前から散々に体験しているのだが。

悪霊だとか生霊だとか。

今にして思うと、自分がそういった不可思議な出来事に巻き込まれる場合は夜間ばかりのような気がする。まあ霊体験なんて夜に起きてしかるべきもののような気がするけれど。

ともすれば、今自分が感じている特別感なんてたいしたものではないという気分になってくる。それ以上にとんでもないことが起こり過ぎだ。

いやいや

むしろこれぐらいで良いじゃないか、毎日のように非日常的な出来事に出会わなければいけない決まりはない。むしろ毎日起きたらそれはもう非日常とは呼べない。自分の境遇なり体験が一般的にいう日常的という範疇から離れていたとしても、不可思議な体験を日常的と呼ぶほど、自分の感性がズレているとは思いたくない。

そんなことを考えながらしばらく歩くこと数十分、何のトラブルもなく目的地に辿りつく。

白皇学園正門。自身と自身の主の通う、見慣れた学園の門。

いや、見慣れたといってもこんな風に閉じている状態を見るのは数えるほどしかなかったか、時間も時間ということもあり、閉じられているのは仕方のないことだが。そこで、今更ながらどうやって中には入ったものかということを考える。見たところ守衛のような人物は見かけられない。初めて来た時は何故か教師が守衛のようなことをしていたが、当たり前だが常に門の前に立っている訳ではない。

さすがに忍び込む訳にはいかない。となると正門とは別の関係者入り口のような場所から入るしかないが、情けないことに、普段利用しないために正確な場所が分からない、という問題がある。今から探す、ということも

出来なくはないが、こんな広い学校から探すとなるとそれなりの時間がかかってしまう。そんなことをするのなら、明日、明るい時間に訪れた方がよっぽど良いだろう。

以前のように誰かが中に入れてくれれば手っ取り早いのだが、そんなに都合の良いことが――

「あれ、ハヤ太君？」

……どうやら、起こってくれたらしい。

「瀬川さん？」

自分に声をかけてくれた少女は門の内側にいて。自分の姿を見つけると小走りで駆け寄ってきてくれる。

「どうしたの、こんな時間に」

その質問に苦笑いをこぼしながら「忘れ物です」と伝えると、「ドジだな」なんて笑いながら、門の鍵を開けてくれる。普段自分は不運だと嘆いているが、こういう時、少しばかり運が向いてくれる気がする。

「ありがとうございます」

笑顔を崩さず迎え入れてくれた後「どういたしまして」と言いながら、彼女はゆっくりと門を閉める。鍵を持っていたのだからどこかに出かけるつもりだったではないか。と尋ねると、もう用は済んだからと言って、と手をひらひらと振る。嘘を言う人ではないし、気を使わせて

しまった訳ではないだろう。

「忘れものって、ナギちゃんのノート？」

と、自分が初めて夜の学園を訪れた際のことと同様の理由なのか尋ねてくる。

「いえ、今回は僕のです」

と、再び苦笑いをこぼしながら素直に答える。嘘をついても仕方ないし、こんなことで主をダシに使うようなことはしたくない。

「瀬川さんは、もしかしてまた勉強会ですか？」

質問を返すと「そうだよ」という言葉が返ってくる。

どうやら定期考査が近付く度に行っているらしい。以前、彼女の仲間が「本当に勉強熱心ならこんな所で試験勉強などしていない」と言っていたが、あれはつまり「普段から勉強していればわざわざ勉強会なんてしなくても大丈夫」という意味だったと思う。

つまり、それにもかかわらず彼女が今ここにいるのは「そういうこと」なのだろう。「よっぽどの事」で落第しそうというのは伊達ではない、ということだろうか……まったく威張れるようなことではないが。

「でも、いちいち泊まりにくるのは面倒じゃないですか？」

何となく質問してみたが、考えみれば、よくあの父親

が彼女の外泊を許しているな、と思う。あの過保護な様子からすると片時も放したくない、と思っけていてもおかしくないものだが……

いや、むしろ過保護だからこそ落第の危機に対して最も効果的な方法をとっているのかもしれない。そう考えると、あの父親に対してちよつと誤解があるかもしれないな、と思い直した。

「全然」

そんな余計なことを考えている中、彼女はいつもの調子で答えてくれる。意外なことにこの勉強会を苦にはしていないらしい。

「もう宿直室にはいくつか私物も置いてるしね」

苦にしていない、というより、勉強会そのものに慣れてしまったというべきか。もう既に環境も作り変えてしまっているらしい。それでも教師よりは圧倒的にマシだと思うが。

「いいでしょ、ハヤ太君だって制服を生徒会室に置いてるんだから」

……そういえばそうだった。考えて見ればあれも私物で間違いない。普段から使わないせいで完全に忘れていた。一応緊急時に使うからという言い訳はあるが、同じことをしている自分に彼女を咎める資格はない。

「まあまあ、そんなに固く考えなくても良いんだよ」

そういつて、彼女はいつもの笑顔を向けてくる。その顔を見ていると、何となくそれで良いんだなという気分になるから不思議なものだ。もちろん、そんな風に流されてはいけないのだろうが、大真面目に考えているのも馬鹿らしくなってくる。

「ふふ、何か良いね」

唐突に彼女はそう言い出す。何がですか、と尋ねると、こうやって一緒に歩くのがと恥ずかしげもなく言う。

「何かちよつと特別な感じ」

少し考えると赤面するような台詞だが、不思議とそんな気分にはならなかった。彼女の持ち前の明るさがそうさせるのか、あるいは今のこの状況に特別感を感じているからか、詳しい理由は想像もつかないが、とりあえず、嫌な気分にはならなかった。

「そうですね」と一言だけ告げて、内心ではこういう非日常なら、頻繁にあつても悪くないかな、と思う。

「それじゃあ、僕はそろそろ行きますね」

ただそんな時間も長くは続かない。名残惜しさは感じるが、自分の目的を忘れてしまつては本末転倒だ。

「ほえ？ 宿直室に寄らなくていいの？」

鍵が必要だと思つたのだろう、ちよつと抜けた顔をし

ての質問。

「教室に忘れた訳じゃないんですよ」

その質問に、何度目になるか分からない苦笑をこぼして答える。その答えに「そっか」と納得したように一言だけ言った後。

「それじゃあハヤ太君」

そういつて満面の笑みを浮かべながら。

「また明日」

彼女の利き腕を大きく振った。

「はい、また明日」

だからこそ、それに応えるために自分もまた、満面の笑顔を彼女にむけて浮かべたのだった。

月影と星屑が零れる夜道、自分は少しだけ特別な気分に浸りながら歩く。

別にたいしたことが起きた訳でもないし、いつも通りといえればいつも通りかもしれない。

それでも、今の気分が嘘だとは思わないから、ほんの少しだけ、願いをこめて言葉を漏らす。

——明日も良い日でありますように——

その言葉は静寂の中に響くことなく。夜風に吹かれて、溶けて消えていった。

- fin -

著者あとがき & メッセージ

【ピーすけさん】

皆様今年はいかがお過ごしでしたでしょうか。

止まり木、おそらく今年最後の合同本ということで、張り切って三点のイラストを寄稿させていただきました。努力の割には上達が見えずお見苦しい限りではございますが、来年も引き続き勝手に精進し、おそらくは合同本のイラストもしつこく描いていきますのでどうぞよろしくお願いいたします。

【ネームレスさん】

おっ久しぶりに書く機会に恵まれたネームレスと申します。ようし書くぞー！と意気込んで設定練れば膨らみ過ぎた世界観は私の手でどうにか出来る許容量を大きく超えて見事空中分解。やっぱり見切り発車で短編ちよこちよこやつてく方が自分に合ってるなーと実感した一作です。どこがとは言いませんが一瞬でも騙されたなら嬉しい限り。読んでくれた方、このような場を用意してくれた方全員に感謝。ネームレスでした！。

【充電池さん】

この調子で合同本の常連になれたらいいなと思う充電池です。こんにちは。

クイズ大会の結果は惨憺たるものでしたが、なんと今回も西沢賞を頂いてしまいました。これはもう西沢さんをメ

インで書くしかないなと思い、勢いで書きました。

前回と同じく「ギャグありシリアスあり」を目標にしてみました。何より短さを意識しました。あんまり長すぎでダレちゃうとアレだと思ひまして（べ、別に面倒だったとか時間が無かったとかじゃないし……）。

書き終えた後に気づいたのですが、偶然にも、前作に続いて「夢」に関する話となりました。場面や話がアレやコレやと移り変わっていくのに、自分や他人は何の不思議も抱かずに物語が進んでいく夢の世界……うまく伝わっていればいいなと思ひました（こなみ）

それではまた、次の西沢賞で。

【明日の明後日さん】

第八回合同小説本発刊おめでとうございます。こんにちは、明日の明後日です。

クイズ大会では最終結果四位と上位入賞からは漏れてしまったものの、第三回ワイ杯三位入賞の景品が適用され、合同本参加の権利を頂くことができました。ワイ杯を除けば初参戦、含めても二回目のクイズ大会でしたので四位という結果には割と満足していたのですが、それに加えて（頭からすっこり抜け落ちていた）ワイ杯景品のお陰でこうして合同本に寄稿することができましたので、なんとというか棚ボタな気分です（笑）

今回は転載枠ということで、どのお話を載せてもらうか少々頭を悩ませました。初めはひなゆめ時代に書いたお話を載せてもらおうと思ひていたのですが、改めてHDの中身を見返してみると明るいお話が意外と少ない。というかバッドエンドみたいなのが多くて、合同本に載せるには気が引けるものばかり。「これだ！」と思ひものもあるにはあったのですが、そのまま載せるのもなんだか恥ずかしい。手直しの試みをするだけしてみたいものの、当時のノリを思ひ出せず思うように進まない。結局旧作の復刻版は諦めて、止まり木SS板に投稿した中で明るいお話を選んでみたのですが、いかがでしたでしょうか。内容に関する言及はSS板内の当該スレッドを参照して頂ければと思ひます。

また、今回は止まり木の誇る巨匠（謎）、ピーすけさんからイラストをお寄せ頂きました。大雑把なイメージしか伝

えていないのに、私の脳内映像とぴったり一致する素敵なイラストを描いて頂き、流石としか言い様がありません。この場を借りて、御礼申し上げます。

なんだかすごくまじめな書き方になってしまつて恐縮ですが、この辺りで失礼させて頂きます。次は実力で参加権を取りに行きまあす！（取れるとは言つてない）

【RIDEさん】

どうも、RIDEです。

今回は修学旅行レベル4を題材にして書きました。

これに決めたのは2週間前。時間はありましたがなんか途中で書くのがつらくなって気が…。

なんでだろう。

なんにしても、今回も無事に書いて良かったです。

最後に。

【瑞穂さん】

こんにちは、普段は感想書きとして、そして茶会でお世話になっております瑞穂と申します。初めて合同小説本に寄稿します。こちらでは「初めまして」になりますね。

今回クイズ大会でfordionさんから権利を譲渡していただき、SSを書くことになりました。実は合同小説本どこ

るかSSを書くこと自体が初めてです(勿論後書きも)。足りないところも多いと思いますが何卒ご容赦願います。(汗)
このお話につきまして、生徒会上位職とハヤテ君を結び付けるお話ですが元々は『三国志』の「桃園の誓い」をベースにした物語であり、是非書きたかったハヤテ君とヒナギクさんとカップリングの要素を加えたものでした。しかし「桃園の誓い」は後漢を立て直す(復興させる)目的で劉備・関羽・張飛が団結することなのでどうしても「纏まる」ことがキーワードになってきます。そこで組織が纏まる為には団体行動がベストだ、ということで私が中学時代に経験した合唱コンクールから連想して書いてみました。

それから、合同小説本「∞」を企画していただきました双剣士さん、執筆の権利を譲渡していただきましたTorbionさん。この場をお借りしてお礼を述べさせていただきます。このような機会を与えていただきましたありがとうございます。ありがとうございました。またこの合同小説本を読んでいただきました皆さん及び止まり木の皆さん、最後まで目を通していただきどうもありがとうございました。

【ロッキー・ラックーンさん】

にゃんぱすー、RRです。合同本の刊行おめでとございます。

今回はクイズ大会前にまさかの訃報が止まり木を震撼させました。入賞したら必ずまつらいさんキャラにちなんだ作品をと考えておりましたのですが、いかがでしたでしょうか？タイトルの38(サンバ)は、まつらいさんの生前最後のブログ更新記事であった38歳誕生日のネタを引っ張ってきました。

さて、作品について。やたらといろんな人から相談を受けるアリスちゃん。いつかはやろうと思っていたFateの中の人ネタでドタバタさせてみました。最後はハヤテに借金を抱えさせるオチをつけましたが、魔法にゼニが必要とさせるだなんて我ながら世知辛い設定にしてしまったと思っております。

あと、毎度毎度ありがたい話ですがPすけ殿のイラスト付きです。ノリノリのヒナと、呆れて物も言えない感じのアリスちゃんがイメージ通りで素晴らしい出来だと思えました。

それでは、読んで頂いた皆様、編集の双剣士殿、毎度ステキなイラストを描いてくださるPすけ殿をはじめとした止まり木の皆様、ありがとうございました。それと最後に松木美愛子さんのご冥福をお祈りします。素敵な声がありありがとうございました。

では、またの機会にお会いしましょう。

【雪月さん】

この作品は合唱曲「Tomorrow」（知らない方はこちら [URL: https://www.youtube.com/watch?v=vU5sf-PfclHE](https://www.youtube.com/watch?v=vU5sf-PfclHE))を聴きながら思いついた作品です。

2015年の夏ごろに、久しぶりに何かハヤテで作品を描きたいけど、思いつかない。という旨をチャットで発言した後に「合唱曲を題材にすれば青春っぽい作品が描けそうだなあ」と考え、合唱曲を聴き漁っていたら「Tomorrow」に辿り着いた。という経緯で描き上げました。思いついたのが夏のくせに今まで描かなかったのか、と問われれば、情けなく頭を垂れるしかないのですが。

何故「Tomorrow」を題材にしようと思ったのか、という歌詞の「また明日」というフレーズが気に入ったからだ、ということに行きつきます。このフレーズが気に入ったために、この作品は、誰かが「また明日」と言うだけの作品となりました。

問題は誰に「また明日」と言ってもらうか、となったのですが、自分の中では泉が「また明日」なんて言いながら笑って手を振る、という情景が一番しっくりきた為に泉になりました。次点はヒナギク。他の女性キャラはあまりしっくりこなかったために没となりました。

「また明日」という言葉はとても素敵な言葉だと思っています。何故ならばこの言葉は、明日という「未来」を信じていなければ絶対に出てこない言葉だからです。いやいや、そんな大それたものじゃないだろう、と思うかもしれませんが。実際こんなことを大真面目に考えている人はいないでしょう。しかし、それは大真面目に考えずとも、明日

という直近の未来をなんとなく信じているからだ、と自分は考えています。なんとなく、深い理由もなく、未来のことを信じられるというのは、なんと素晴らしいことか。大げさな言い方になりますが、この作品を考えるにあたり大真面目に考えたことだったりします。

長くなりましたが、これにて後書きを終わらせていただきます。この作品に少しでも心を預けていただけたなら幸いです。

雪月でした。

編集後記

第4回で終えるはずだったクイズ大会も、いつの間にかやらの2倍。有志合同本も含めて11冊目の合同本をお届けします。今回もイラスト込みで8人参加という豪華な顔ぶれがそろってくれました。今回はクイズの途中退場者と執筆権辞退者を除けば参加者全員が執筆権を得るという状況で（出題者はノーカン）、執筆のテンションが下がらないか少し心配していたのですが、力作揃いの原稿を拝見して自分の短慮を恥じ入るばかりであります。

あとがきでRさんも触れられていましたが、今回のクイズ大会直前に突然の訃報が飛び込み、止まり木にも衝撃が走りました。これでアニメ5期の可能性はほぼなくなり、原作者のBackStageもアスパラの話題ばかりとなり、原作の方も主人公が借金完済という露骨な伏線回収段階に入りつつありますが……でもそこで自由に妄想を広げてこそSS書きの冥利に尽きるというものですよね。顔をあげて胸張って進んでいきましょー！

さてクイズ大会は例年5月と11月に開催していますが、その間を縫う形で有志合同本を入れるのが最近のパターンとなってきました。8月はイラスト合同本でしたので、今回は来年2月。お題は当然「バレンタイン」です。甘い話ドタバタな話どんでん返しの話など、工夫を凝らした作品を楽しみにしています。

……さて、私もワイ杯の2連覇に向けて、ラスボス狩りの準備をするかな。

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.08

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2015年12月13日